

ワルシャワ蜂起と国内軍総司令部

——蜂起最終決定の背景—— (3)

(E) 国内軍総司令部作戦参謀ヤヌシュ・ボクシュチャニン大佐との会談覚書

Interview with Col. Janusz Bokszczanin, the Operational Chief of the Polish Home Army

ヤン・M・チェハノフスキ

Jan M. Ciechanowski

(渡辺克義 訳)

(trans. by Katsuyoshi WATANABE)

訳者まえがき

以下に示すのは、KG AK で作戦参謀であったヤヌシュ・ボクシュチャニン大佐とヤン・チェハノフスキのインタビューである (Jan M. Ciechanowski, *Notatka z rozmowy z płk. dypl. J. Bokszczaninem ("Sękiem") od stycznia do lipca 1944 roku z-cq Szefa Sztabu KG AK do spraw operacyjnych, odbytej w Paryżu 14 i 15 listopada 1969 roku, Zeszyty Historyczne, nr 27, 1974*)。

このインタビューでチェハノフスキは同じ質問を繰り返したり、角度を変えて同じ問いをしている場合があるが、これはおそらく被会見者の記憶の精度を確認するねらいがあったのであろう。ともあれ、本インタビューが、ワルシャワ蜂起最終決定の背景を探る上で最も重要な史料であることはまちがいないところである。

* * * * *

J. ボクシュチャニン大佐との会談覚書

ヤヌシュ・ボクシュチャニン大佐 (暗号名、“センク”、“ヴィル”) は1894年10月29日に生まれ、1973年8月1日に逝去した。経験豊富な最も優れた将校の一人である。1940-45年、軍の要職を歴任し、地下軍の参謀将校であったが、一般にはあまり知られていない。ZWZ および AK において、ボクシュチャニン大佐は順に次の地位にあった。ワルシャワ市モコトゥフ地区司令官、兵站部長代行、武器部長、作戦部長代行、作戦参謀代行、(蜂起終焉後に) 総司令部参謀長、である。1945年2月に国内軍が解散すると、ポーランド軍国内代表代行を務め、「自由と独立」(WiN) 司令部のメンバーともなった。

ボクシュチャニン大佐はロシア軍からその軍歴を始めた。第一次世界大戦では、ロシア軽騎兵隊第4連隊に所属した。1917年にそこを離れ、ドヴブル＝ムシニツキ將軍麾下の在ロシア・ポーランド軍に異動。ジェリゴフスキ將軍の師団とともに1919年夏、ポーランドに戻った。ポーランド＝ソ連戦争でのコモルフ戦で際立った働きをし、軍事功労十字賞 (Krzyż Virtuti Militari) を受けた。

同戦争後も軍に残り、指揮・参謀関連の地位を経て、軍事教練の最高のポストを得た。1939年3月、マチュク將軍率いる装甲化騎兵隊第10旅団で騎兵隊長となった。九月戦役では、勇猛果敢な連隊長として傑出した働きをした。ルヴフ近郊の戦場で腕を負傷し、ソ連軍の捕虜にとられた。しかし、ブジェジュヌイの病院に数ヶ月いたただけで釈放された。[ソ連軍の]小隊兵士を装ったからである。ソ連軍は、ボクシュチャニン大佐の正体を見抜けなかった(病院には大佐の連隊の兵士も数名入院していたのであるが)。ボクシュチャニン大佐が自分の部下から敬愛されていたことの証左である。

ルヴフの病院を退院後、ボクシュチャニン大佐はワルシャワに向かい、1940年2月にZWZ に合流した。1940年5月、ワバンカに遭い、パヴァクおよびスカルイシェフスカで7ヵ月間ドイツ軍監視下の刑務所に入れられた。収監中に重い心臓病を患った。1940年10月 [訳注—前文の「7ヶ月」と符合しない] に釈放され、いわゆる「地下検

疫所」を経て、ZWZに戻り、精力的に活動した。

1941-44年に作戦参謀であったスタニスワフ・タタル將軍の報告によれば、ボクシュチャニン大佐は、AKの作戦計画の立案にあたり、彼と緊密な協力関係にあったという。タタル將軍の見解では、ボクシュチャニン大佐は作戦問題に関しすべてを把握していたとのこと。

1944年1月、ボクシュチャニン大佐は、ブル＝コモロフスキ將軍がタタル將軍をロンドンに「放出する」ことを決めたあと、KG AK内で作戦参謀代行の地位に就いた。地下軍の作戦構想を練る最高責任者となったわけで、KG AKの階級の中でも3大重要ポストに就いたのであった。

1944年7月、ブル＝コモロフスキ將軍はボクシュチャニン大佐をその職から解き、新しく国内にやって来たレオポルト・オクリツキ將軍を作戦参謀に任命した。こうしてAKは半年のうちに3人目の「作戦担当」を得たのであった。この事実はその後の首都の命運に重大な影響を及ぼすことになる。1944年1月、ブル＝コモロフスキ將軍は「嵐」作戦の考案者であるタタル將軍を追い出した。ブルの報告によれば、タタルは彼に、在ロンドン〔亡命〕政府にロシアと和解するよう圧力をかけようとしていたという。タタルは、ロシア当局に対してAKが姿を現すことには賛成だが、首都での戦闘には反対であった。さらに、タタルは、AK指揮官が政治的声明を出すことは「挑発行為」と見なされる、との見解だった。一方で、AKが姿を現すことは不可避であると考えていた。赤軍が自軍の後方にAKの地下軍の存在を容認するとは思えなかったからである。タタル將軍によれば、このことは「赤軍からの」抑圧行為を誘導し、ポーランド＝ロシア間の戦闘に発展しかねないものだったのである。

1944年7月、AK総司令官はボクシュチャニン大佐の任務を解いた。この点について、当時のKG AK参謀長であったペウチンスキ將軍は次のように説明する。「オクリツキがポーランドに戻ってからは、ボクシュチャニンは総司令部で必要がなくなったのである。彼を第三部につなぎとめておくこともできなかった。作戦計画をまとめるにあたり、適任ではなかったからだ。決断を下す時には、条件が整っていなくても決断の必要がある場合がある。ボクシュチャニンは何も決断できなかった。いつも状況を報告し、可能性に触れるだけだった。ボクシュチャニンは参謀部および兵站部での作業に協力する構えだけは十分だった。思考の正確さで際立っていた」。

以上の発言から、1944年7月（蜂起開始の直前）ブル＝コモロフスキ・ペウチンスキ両將軍は、総司令部内に力強い、決断力のある、大胆な作戦参謀を求めていることがわかる。KG AKからは「現実派」が締め出され、替わって「理想派」が据えられたのであった。

ボクシュチャニン大佐は蜂起勃発の報にワルシャワ近郊のボエネルフで接したが、知らせは驚きだった。ボエネルフから戦闘中のワルシャワに向こうとしたが、負傷し、またしてもドイツ軍に捕虜にとられ、ドイツに強制労働に送られた。9月下旬、労働収容所を抜け出し、ワルシャワ近郊まで戻ったが、ワルシャワへは蜂起終結前に戻ることはできなかった。

ボクシュチャニン大佐は実戦も積んだ、参謀部の優れた将校であったが、「決断力」を欠いていたように思われる。その点で、オクリツキ將軍とは対極にあった。

ボクシュチャニン大佐からは会談内容の一部を非公開にするようにとの要請があったが、私はすべてを公表することを決めた。事の性格上、主観的になるが、ポーランド現代史にとって比類なく重要な史料となるであろうと判断したからだ。歴史は民族の所有物であり、個人のものではない。第二次大戦中に高位にあった者や、我々の政治的・軍事的活動を垣間見た者は、墓場まで秘密を持って行くことは許されない、と私は思う。もしそうでなければ、我々の歴史は貧弱なものになってしまう。関心のある向きには、歴史についてご発言願いたいと思う。このようにしてのみ、ボクシュチャニン大佐が語った事件や決断や人物が十分に照射できるであろう。

(ヤン・M・チェハノフスキ)

1969年11月14-15日。

会談に先駆け、ボクシュチャニン大佐から一言あった。1944年7月31日のKG AKの午前の幹部会で、第II部長イラネク＝オスメツキ大佐は、駐留ドイツ軍および鉄道でワルシャワに到着するドイツ軍の配備について、極めて正確かつ詳細な報告を行った。第II部長の報告は十全足るものであり、陸軍士官学校の生徒にとって模範となるようなものだった。イラネク＝オスメツキ大佐は十分な情報を得ていた。彼はドイツ軍の配置についてだけでなく、移動中のドイツ軍がいつ終結予定地に達し、戦闘に入れるかについての予測も示した。第II部長は、ドイツ軍の軍事輸送に通じたポーランド人鉄道関係者と連絡を取っていたのである。

以上から、ボクシュチャニン大佐は、7月31日の午後にブル＝コモロフスキ将軍に対し、プラガ地区でドイツ軍の反撃が始まったと伝えたのは、プルタ＝チャホフスキ大佐でなく、イラネク＝オスメツキ大佐であった、と思っている。

J. M. C. : ワルシャワ東方の戦況分析を行ったのが、この問題のスペシャリストである第Ⅱ部長ではなく、“モンテル”大佐であった理由が理解できない。

J. B. : “モンテル”は現場指揮官として、ワルシャワ東方に連絡網を築いておく必要があった。しかし、“モンテル”の諜報網は手薄で、深みに欠け、東に向けられていたというに過ぎない。KG AK 第Ⅱ部のほうが“モンテル”の諜報部より正確な情報を把握していた。そうではあっても、7月31日午後にブル＝コモロフスキ中将にたいしてなされた、ソ連戦車がプラガ地区に現れたという“モンテル”の報告は、事実にもそのものであった。“モンテル”は戦後私にそのことについて語ってくれた。ポニャトフスキ橋を歩く市民が、そこにいた“モンテル”の斥候に、3輛ないし5輛のソ連戦車をプラガで見た、と言ったのである。私はもちろん、これはソ連の偵察隊であったと思っている。“モンテル”の報告が捏造ということはない。31日午前の段階では彼は戦闘に反対していたのだから。しかし、手遅れの事態を恐れていた。だから、報告を受け次第、彼はブル＝コモロフスキ将軍に伝えたのである。市民行政部が解放後の街で組織運営に当たるために最低でも12時間は確保しておけるよう、戦闘を開始すべきである、と“モンテル”は考えたのだ。この任務は達成不可能であった。ソ連軍はドイツ軍の背後を襲ってワルシャワへの砲撃に入るだろう。襲撃はドイツ軍の敗走と同時進行で起こり、駆逐も行うというものだ。12時間は、解放後の首都の主人として市民行政部が組織化に必要とされるものだ。その市民行政部は侵入してくるソ連軍と対峙することになっていた。

31日（私が臨席した参謀部の最後の会合）の2、3日前、政府代表は、ペウチンスキ、オクリツキ、および私がいる時に、“ブル”にAKに指令を出したことを貴殿（チェハノフスキ）はご存じだろうか。これがあったのは、31日午前の会議と同じ場所だった。

政府代表は、紅茶を出すために準備されたテーブルのそばに厳かに立ち、“ブル”にこう言った。

「貴司令官にAKに対する指令を与える。まず、しかるべき条件と時期が熟した時に、作戦を始めよ。次に、都市の解放に先立ち、市民行政部に最低でも12時間の猶予を与えよ」。

以上を語ると、自らの使命を憂慮していた政府代表はそこを離れ、“ブル”に案内されて戸口に向かった。政府代表が“ブル”の部屋にいたのは5分にも満たなかった。政府代表がいた時、作戦会議のメンバーは皆出席していた。

政府代表が去った後、“ブル”将軍は出席者に尋ねた。「諸君の意見は？」と。

私は反対意見を述べた、「作戦は実行不可能だ」と。

オクリツキ将軍は言った、「ペシミスト、敗北主義者、抗議者」と。

ペウチンスキ将軍は同意し、「中佐殿、軍では、やろうと思えば、どんな任務も遂行可能ですぞ」と言った。

オクリツキ、ペウチンスキ、“ブル”の発言と反応から、だいぶ前に決定済みのことだとわかった。なんのために会議を招集したのか。私はなぜ呼ばれたのか。

それまでに半ば私的に聞いていたことだが、政府代表は最初72時間を、のちには48時間を要請したらしい。それだけに、12時間というのを聞いた時には私は訝ったものだ。

J. M. C. : 市民行政部を戦闘中に組織できなかったのか。例えば、地下で組織し、戦闘終了直後に表に出るとか。

J. B. : 市民行政部はソ連軍の前に主人として現れることになっていた。したがって、12時間では組織編成には時間が少なすぎた。行政部はソ連軍を解除し、彼らに兵舎等を提供する手はずだった。

7月31日午前の作戦会議で、12時間問題は長時間議論され、検討された。第Ⅲ部長のショスタク中佐は、「1時間遅れになるくらいなら、一日早く始めるほうがいいだろう」と言った。[政府]代表に12時間を与えるように戦闘を開始することだけが、もう問題だったのだ。

J. M. C. : 中佐殿が最後にブル＝コモロフスキ将軍を見たのはいつか。

J. B. : 31日の午後に“ブル”に離任を申し出た。総司令部を離れて、近くの待避場所に移る旨を伝えた。私は次の空輸でイギリスに向かうことになっていたのだ。“ブル”との別れは心のこもったものとなった。熱く接吻を交わした。その場にはペウチンスキがいた。

J. M. C. : 中佐殿がワルシャワで蜂起の可能性があることを知ったのはいつか。

J. B. : ワルシャワでの蜂起は1942年以降、いつでも起こしえるものとして計画されていた。これはロヴェツキ将軍の見解と計画に符合しており、決して撤回されることも変更が加えられることもなかった。私はこの計画を遵守した。問題は蜂起をいつ始め、どのように実施するかであった。ロヴェツキは、蜂起は成功に現実味があつて、ドイツ軍が蜂起兵や市民に報復が行えないような時に開始すべきとの意見であった。ロヴェツキ将軍の計画は、ドイツ軍の後衛を襲うことにより、ワルシャワからドイツ軍を一掃し、市街戦を最小限に抑えることを目論んでいた。オクリツキはこの計画を承認していたが、計画の中心となる考えは過度に防衛的で、臆病になっているとさえ見ていた。彼によれば、現状でドイツ軍を倒せるとのことだった。ワルシャワにいるドイツ軍を袋叩きにしたかったのだ。ロヴェツキの計画では、ドイツ軍の撤退路としてケルベチ橋とレシュノ通りとヴォラ地区は残しておくことになっていた。つまり、敗走するドイツ軍が橋梁を経た撤退路を開鑿する必要がないようにとの配慮だった。東からはプラガ地区から撤退する部隊が、西からは援軍が向かい、ワルシャワ中央で出会うには違いなかった。

1942年の計画は、ロヴェツキ将軍の方針に従い、タタル将軍が起草したものだった。私はこの計画を時宜にそうものにした——1944年の6月末まで。計画では、①ドイツ軍は容易にはワルシャワを出ず、いずれにしても首都を制圧する、②敗残兵と掠奪者を一掃する必要がある、ことが想定されていた。この作戦の遂行は、一斉蜂起の実施いかんによらず、計画されていたものである。

J. M. C. : では、どのような場合に、ワルシャワから4万人の武装兵を西部準地区に移し、ドイツの連絡線を攻撃することが予定されていたのか。

J. B. : ドイツ軍が長期にわたりワルシャワを防衛し、作戦が長期に及びそうな場合は、市民に対する抑圧と強制移住があるものと想定していた。この場合、若者を郊外に送り出す予定だった。ドイツ軍がワルシャワから撤退する場合、あるいは、ドイツ軍が市民の絶滅政策に着手するようなことがあれば、ワルシャワで（絶望的な試みとしての）蜂起が発生する場合があろう。そのような場合に備え、部隊を編成するつもりだったのだ。その時、郊外から首都にこの部隊による攻撃が行われるはずだった。

ワルシャワは、後方攪乱の「嵐」作戦から外されたただけだった。「嵐」は人口集中地での戦闘を避け、そうではない地域での作戦遂行を標榜していた。

J. M. C. : 大佐殿が言われていることは、ブル＝コモロフスキとペウチンスキが作戦について習熟していなかったということか。

J. B. : ロヴェツキはペウチンスキの戦略上・作戦上の軍事知識を当てにしていなかった。それゆえ、作戦参謀（タタル将軍とボクシュチャニン大佐）は参謀長のペウチンスキ将軍と直接コンタクトを取っていなかった。ロヴェツキが指揮していた時は、AK 総司令官は作戦参謀と直接計画を議論していた。“ブル”とペウチンスキはこのことをあまりよく把握していなかった。彼らは話合いの結果について知っていただけだ。（以上は私が受けた印象にすぎない—J. B.）個人的には、作戦計画を話し合うためにペウチンスキや“ブル”に呼び出されたことは一度もなかった。私は、ロヴェツキの指針はその後も活きているものと思っていた。

J. M. C. : 大佐殿の蜂起計画とはいかなるものだったのか。

J. B. : これは、ロヴェツキがまとめた構想と指針とに立脚するものであった。“ブル”とペウチンスキはこの指針について多くを知らなかった。ペウチンスキは諜報と編成に従事し、“ブル”は政治問題、[軍の] 統合合併、政治家（とりわけ右派）との接触に関係していた。ロヴェツキは政治家が好きではなく、軍事問題に多く関わっていた。したがって、とても手間のかかる政治家との交渉は“ブル”に肩代わりさせていた。

J. M. C. : ワルシャワの問題に関するロヴェツキの主な指針とはいかなるものだったのか。

J. B. : ロヴェツキは、ワルシャワでの戦闘は避けえないと見ていた。作戦は少なくとも政治的なものになるだろうとも。首都では何か起こさなければならず、その政治的意味合いを考えると、我々で自力解放する必要があった。ロヴェツキはこの問題に関するすべてを作戦参謀と片づけていたのだった。

J. M. C. : 大佐殿が自身の任務をオクリツキ将軍に委ねたのはいつか。

J. B. : 形式上は一度もそうしたことはしていない。

J. M. C. : 作戦参謀の権限の範囲とは？ 作戦参謀には、自分のために動いてくれる、なんらかの実行機関が付随していたか。

J. B. : 作戦に関わるすべての問題に、ロヴェツキが、参謀部の第一代理である作戦参謀と協力して当たっていた。

これは、ロヴェツキが創設した特別な役職であった。作戦参謀は、AK 総司令官のために働くポストであった。立案に関わるものであった。すべての計画は作戦参謀でまとめていた。

J. M. C. : 計画書はどこに置かれていたのか、作戦参謀のもとか第三部（作戦）か。

J. B. : 計画書のすべては作戦参謀のもとにあり、第三部にはなかった。

J. M. C. : 第三部は実行機関で、作戦参謀のために働くと思っていたのだが……。

J. B. : そうなるべきだったのだが、実際にはそうではなかった。個人的には、私が作戦参謀を務めていた期間に、つまり1944年1月から7月までの間に、シヨスタクと会ったのはたった一度だけだった。シヨスタク（第三部長）はペウチンスキから指令を受けていた。第三部は主に実戦に関わっており、一方作戦参謀は立案に従事した。第三部は実際には作戦参謀のためには動いていなかった。加えて、タタルはペウチンスキを嫌悪していた。

J.M.C. : ということは、参謀部内の関係はきわめてまずいものであり、手続き的な面も複雑だったというわけか。

J. B. : そうだ。私はタタルからすべてを引き継いだ。それ以前、私は、蜂起後の軍の再建を主任務とする武器部長であった。この問題にロヴェツキはとても関心があった。私はタタルと、ロヴェツキの幹部会に出席したものだ。共に、編成問題を議論した。タタルが離任前に私に語ったところでは、シヨスタクはすべてを把握しているとのことだった。蜂起勃発後、私はシヨスタクに2度会っている。

J. M. C. : ワルシャワ攻防戦を起草したのは誰か。

J. B. : 戦闘計画自体は“モンテル”が起草した。第三部はこの起草に一定の指針を与えた。

J. M. C. : “モンテル”に対する総体的な指針とはいかなるものか。

J. B. : それは次のようなものだった。一斉に2方面で攻撃すること。つまり、モコトッフからシルドミエシチェへの主たる攻撃（ヴィスワ川沿いに南から北へ）と副次的攻撃（ジョリボシュからシルドミエシチェへの、北から南への攻撃）である。シルドミエシチェ自体では、ドイツ軍に撤退路（キェルベチ橋、レシュノ通り、ヴォラ地区）を残しておく。攻撃はドイツ軍の後衛に対してしかける。蜂起司令部と予備軍はモコトッフに駐留する。“モンテル”が作成した計画にオクリツキが変更を加えた。オクリツキの考えは、「ワルシャワでドイツ軍を叩け」というものだった。

J. M. C. : オクリツキが総司令部で仕切り始めたのはいつか。

J. B. : オクリツキは“投下”から1ヵ月は隔離されていた。ワルシャワの外にいたかもしれない。この間、彼は何の任務も果たしておらず、誰とも連絡を取っておらず、幹部会にも参加していない。

J. M. C. : オクリツキが作戦参謀に任命されたのはいつか。

J. B. : 7月初めのKG AK 幹部会で（水曜日と金曜日に開かれていた）、軍最高司令官に宛てる報告書が示された。コモロフスキは私に、「貴殿はお残りください」と言った。その後、ペウチンスキに発言させた。彼は最初は私を褒め称えていたが、その後でこう言った。「我々は意見が合わず、一緒に仕事することが難しい。オクリツキに作戦参謀になっていただき、貴殿にはロンドンに行って、タタルの協力をしてもらおうか、タタルの代役を果たしていただきたい」。その時私は、「任務をオクリツキに委ねるのはいつになるのか」と尋ねた。ペウチンスキは、こう返答した。「それなら、私がやる。シヨスタクがもうオクリツキと連絡を取っている。オクリツキはまだすべての問題に通じているわけではないので、協力が必要になった場合に貴殿に幹部会にご出席いただく」。1935年のルヴネ時代以降、初めて私はオクリツキに会ったが、その時に、任務の引継ぎについて話すと、彼は、すべてわかっているとのことだった。もう第三部に足を運んでいるので、私から必要なことは何もないという。書類は伝令が持つて行くとのこと。こうして私は、オクリツキがまとめた仕事に一切関与することがなかったのだ。

J. M. C. : 大佐殿が総司令部を離れることになった経緯はいかに。

J. B. : 主たる理由は、オクリツキ將軍の派遣だった。將軍の彼が来たわけだから、彼と何かをやる必要があったし、彼に何かを与える必要があった。もうひとつの理由は、ドイツ軍の戦況の評価をめぐって私とペウチンスキの間で食い違いがあったことだ。ペウチンスキはドイツ軍の潜在力を正当に評価していなかった。ドイツ軍の瓦解は近いだとか、その徴候がいたるところで見られる、などと言っていた。三つめの理由は、軍最高司令官に宛てた作戦報告をめぐる問題だ。地下運動の観点から私はこの報告書をまとめたが、この作業に当たるべきは第三部だった。しかし、これには新たな接触、新たな会合などが必要だったであろう。またこのことは、いかに困難な状況の下でKGが動いていたかを示している。私は、地域からの報告に基づいて事実を事実のままに報告書をまとめたいと思った。ペウチンスキは、軍最高司令官に対し、英国からAK に対するより多くの協力を得やすくするよう、誇張し

て伝えることを望んだ。私は、これは軍最高司令官に情勢を伝えるための報告書であるべきだと思っていた。それゆえ、誇張した報告をすべきか、正直な報告をすべきかが問題だった。私は報告書を書いていたのだが、ペウチンスキがそれに修正を施していた。

J. M. C. : 大佐殿の離任には「表に軍が現れる」かをめぐって、論争があった結果だと聞いているが……。

J. B. : 失念してしまった。「表に現れる」問題はあった。軍最高司令官は表に現れることに反対だった。私自身は、表に現れることは無意味だと思っていた。ロシア人が情勢を利用して、参謀部を丸ごと逮捕するだろうと思ったのだ。AK は頭をもぎ取られた状態となったことだろう。表に現れることにどんな意味があるというのか、私は尋ねた。ロシアとの間に外交関係がないというのに、彼らが律儀にも協力関係を申し出ることなどなかっただろう。

ペウチンスキはこう言った。律儀な協力関係を当てにすることは難しいが、表に現れる必要がある、やってみなければ、と。表に現れることを望まないことで、私が結束を乱している——ペウチンスキはそう非難した。私は他の者の見解から離れてしまっていた。このこともまた解任の理由だった。

“コルトゥム”〔第I部（人事）長〕は、表に現れるべき人物の一覧をまとめた。その中には私も入っていた。私は“コルトゥム”に、私は表には現れない旨を伝えた。“コルトゥム”はこのことを後に報告している。

7月21日まで議論されていた蜂起の計画では、KG AK は、戦闘になった場合、ワルシャワの外、つまりスパウイに出ることになっていた。比較的穏やかな状況下で機能し、かの地から全土を指揮するはずだった。ワルシャワ戦が長期化した場合や指揮系統の一部が奪われた場合、指揮が遮断される事態を防止する意味があった。ワルシャワにはAK 総司令官と少数の将校が残り、表に現れることになっていた。7月21日以降、KG はワルシャワに残ることが決まった。

J. M. C. : ワルシャワでの戦闘について KG はどのように思い描いていたのか。

J. B. : ワルシャワは大きな戦闘交えることもなく〔AK により〕制圧されるであろう、と。ワルシャワで対独戦を遂行するというオクリツキの考えは、当初の計画に新たな要素を取り入れた。オクリツキはドイツ軍に報復したかったのだ。ドイツ軍を袋叩きにするというものだ。

J. M. C. : 蜂起を実施するか否かをめぐって、KG で賛否の表明はあったか。

J. B. : あった。7月31日朝だ。会議はペウチンスキの報告から始まった。次にイラネク＝オスメツキがドイツ軍の状況について、“モンテル”が自分の部隊の状態と武装化について話した。報告の後、“ブル”は全員に、蜂起発令の時は熟したと思うか否か、意見を述べるようにと命じた。参加者の発言の後、“ブル”はいま一度、「是」か「否」か、一言で意見を述べるようにと皆を諭した。ペウチンスキはこの意見表明には加わず、「まとめると、『是』が3人、『否』が4人」だと述べた。蜂起の即時開始に賛成だったのは、オクリツキとショスタクで、反対は“モンテル”と私だった。その他の参加者の一人が賛成、二人が反対だった。反対したひとりはいラネクだったと思う。他のものがどういう意見だったか、失念してしまった。

J. M. C. : オクリツキ將軍は国内において、軍最高司令官の信任を受けた特使と見なされていたのか。

J. B. : ちがう。オクリツキは国内では軍最高司令官に最も敵対的だった。

J. M. C. : ということは、要するに、「ソスニコフスキが国内にオクリツキを戻し、オクリツキが蜂起実施を促した、つまり、ソスニコフスキ自身も蜂起を望んでいた」という考えは間違いだということか。

J. B. : そうだ。国内のオクリツキを軍最高司令官と同一視してはいけない。

J. M. C. : タタル將軍がロンドンに送られ、そこで国内問題担当作戦参謀に任じられたのはなぜか。

J. B. : タタルは AK の状態と可能性について最も精通した将校だった。さらに、タタルは、前線の状況が政治情勢に影響を与えると考えていた。彼は、ソ連はポーランドの全域とドイツの一部（東部ドイツ）を占領するとし、持論を裏付けた。結果的にポーランドはロシアの掌中に入り、潰滅させられるかもしれない。したがって、ロシアと協議し、領土的に妥協してでも（西部で埋め合わせをしつつ）ポーランド＝ロシア外交関係を再開すべきだとした。タタルはエンデツィアの考えに近かった。ドモフスキの政策の信奉者だった。つまり、ロシアとの融和を標榜した。ポーランドにとってロシアのほうがドイツよりも脅威だと主張した。ポーランド人のほうがドイツよりも文化レベルが高いので、ロシア人は（ドイツ人がやろうとしたようには）ポーランドを崩壊させられない、とタタルは考えていた。

J. M. C. : タタルの論法は KG ではどのように受け止められたのか。

J. B. : タタルの仮説は論理的で多くの証拠に裏づけされていたから、各々は同意せざるをえなかったはずである。

タタルは自説を説くために図解してまで、予想される展開と状況を説明した。しかし、東部国境の変更に同意する者はいなかった。タタルは、ロシアが勝利し、東部で支配者になると主張した。英米はこうなることに反対はしないだろう、と。それだけに、ロシアに譲歩し、[その代わりに]西部でできるだけ利を得るべきだ、と。

J. M. C. : タタルと、ブル＝コモロフスキおよびペウチンスキの違いは実際はどのようなものだったのか。

J. B. : タタルは、西側はポーランドを守ってくれないと考えた。“ブル”とペウチンスキは、守ってくれるはずと考えた。タタルの仮説は現実のものとなった。タタルが予想したとおりになったのだ。彼の予想は的確だった。仮説は極めて論理的だった。スターリングラード後、誰もが、ロシアはポーランドを征服すると思ったが、タタルは、それ以外のことは起こりえないから、そうなることを主張した。他の者はこの不愉快な考えをはねつけ、他の展開もあるのではなかろうかと幻想を抱いていた。

J. M. C. : タタルは、AK がロシア人の前に現れることに賛成だったのか。

J. B. : タタルが、表に現れることに賛成だったか否かについては回答できない。どちらかと言えば、賛成だったであろう。反対はしていなかった。ほかに採るべき方法がないと見ていた。しかしながら、所定の方式に従った報告を出すことには反対していた。

J. M. C. : ということは、「ポーランド共和国政府の命令により、ご報告申し上げます」という類のことか。

J. B. : そうだ。タタルはこうしたことは挑発にあたると思っていた。

J. M. C. : タタルには AK 内に同調者がいたか。ペウチンスキ將軍は私に、タタルは若手砲兵将校から敬愛されていたと語ったが。

J. B. : タタルは KG に信奉者を持たなかった。そこでは孤立していた。当時、療養中だったキルフマイエルだけが似たような考え方をしていた。ただし、タタルは上司に対して誠実かつ忠実だった。自分の考えを陰で広めるようなことはしなかった。堂々と反対意見を述べた。もめることもあった。自分の見解を守った。何かをすれば、きちんとこなした。タタルの軍での評判は良好で、一般に尊ばれていた。とても頑固で、自分に自信があり、自信満々だった。とても気難しく、共同作業にはまったく不向きだった。タタルはロヴェツキを尊敬し信頼していた。タタルにすれば、“ブル”は役立たずだった。タタルとペウチンスキは何事でもそりが合わなかった。彼らの間には相互不信が支配的で、憎しみさえあった。タタルはショスタクを避け、私に対しては、彼には用心しろと言っていた。ショスタクをペウチンスキの仲間だと見ていた。ペウチンスキに対しては異常なほど疑いの目で見ており、サナツィアに戻り、自分の周囲は自分の仲間、つまりレギオニスタで固めようとしていると捉えた。ショスタクはレギオニスタだった。タタルは一方戦前のロシア軍の出である。

J. M. C. : どのようにしてブル＝コモロフスキ將軍は AK 総司令官に任命されたのか。

J. B. : “ブル”はクラクフで潜伏に失敗し、ワルシャワに移ってきた。長らく何もしていなかった。ロヴェツキは彼を自分の代行に命じた。“ブル”は政治問題に従事した。ロヴェツキは政治が嫌いで、軍事に専念したかったのである。“ブル”は政治家たちと話をしていた、とくに右派の面々と。困難で解決が遅れていた統合問題を話し合った。ある日、政治家たちはすべての点で合意し、次の日にはすべて解決した。

ロヴェツキが逮捕された数日後、“ブル”は私に、ロヴェツキ逮捕につき、当面 AK の統括に当たる旨、ロンドンに打電したと語った。ロンドンはこれを了承し、彼は AK 総司令官に任命されたのである。

J. M. C. : 私にはブル＝コモロフスキがその地位にふさわしい人物には思えない。軍人としても文民としても、このような高位での素養がまったくなかったのであるから。

J. B. : そのとおり。素養は皆無だった。

J. M. C. : ブル＝コモロフスキはそれを自覚していたか。

J. B. : 自覚していた。すべての点でペウチンスキに頼らざるをえなかった。あれだけの問題に対処しなければならなかったのだから。

J. M. C. : ブル＝コモロフスキは軍最高司令官に忠実であったか。

J. B. : コモロフスキは軍最高司令官に対して忠実であろうとしたが、周囲に譲歩していた。混沌とした地下活動で狼狽していた。極めて難しい地位にあったが、任務遂行に必要なものを欠いていた。

J. M. C. : 大佐殿は、ブル＝コモロフスキが周囲に譲歩していると言われたが、このことはどう理解すればよいのか。

J. B. : 周囲とはペウチンスキのことだ。ロヴェツキの指令は単純明快だった。彼は自分が何を望んでいるかわかっていた。ロヴェツキはいつも意見に耳を傾け、問題を議論した。しかし、望んだことは実行した。“ブル”にはこ

れがなかった。ペウチンスキは私には極端な理想主義者あるいは神秘主義者に思えた。

国内の指導者の行動には、多分に神秘主義的なものやロマンティックな点や見せかけが見られたが、計算はないように私には思われた。

そう、計算はなかった。

J. M. C. : ロメイコはヴィエニャヴァについての書籍 [原注—M. Romeyko, *Wspomnienia o Wieniawie i o rzymskich czasach*, Londyn 1969, s. 117] で、ポーランド軍には2通りの参謀将校がいると書いている。ロマン主義者で、計算のできないレギオニスタたちと、冷静に思考し計算もできる、分割国の軍出身の将校たちである。大佐殿はロメイコの意見に与するか。

J. B. : ポーランド軍には2種類以上のタイプの将校がいた。様々な将校がいた。ロメイコの分類はわかりやすすぎる分類だ。しかし、こう言っていいだろう。レギオニスタの将校は舞い上がりやすく、ふわふわとしがちで、分割国出の将校は地に足が着いており、専門性もあった、と。軍がその証左だ。自分の仕事をしていた。

J. M. C. : KG AK がなぜあれほど政治問題に関与したのか理解できない。軍事問題に専念する代わりに、社会改革の問題に関わるなどしたことが。

J. B. : AK 司令官の地位は、すべての問題に関わることを求めたのだ。だから、政治についても。社会改革の問題も必須だった。1939年以前の条件に戻ることはないのは皆承知していた。政治家たちは戸惑っていた。唯一の現実的力である AK にすべてを押し付けていた。それゆえ、たえず政治に携わる必要があったのだ。たえず巧妙に切り抜ける必要があったのだ。軍は事実上なかった。あるのは参謀部と、周囲に影響される大勢だった。その大勢を操る必要があったのだ。

J. M. C. : 最終決定の問題はどのようであったのか。

J. B. : 一週間ですべてが一変した、それまでに決めた一切が。ドイツ軍は崩壊したと思われた。これは、最初から最後まで誤った軍事的判断であった。新たな合言葉は、「伸びているドイツ軍を叩きのめせ」だった。

J. M. C. : 私にとって疑問なのは、武器がないことを知っているはずの軍が、蜂起開始の指令を出していることである。このことがわからなかったのであろうか。ペウチンスキ将軍は、パリの民衆がバスターユに向かった時、手にした棍棒の数を数えていなかったではないか、と言った。

J. B. : KG AK は民衆ではない。“モンテル”は7月31日にすべてを報告している。武器はない、自らの部隊は脆弱である、などと。オクリツキは「武器はドイツ軍から奪え」と言った。“ブル”と別れた後、私はボエネルフに向かった。8月1日にワルシャワでの発砲を聞いた時——銃声と手投げ弾の爆発音を聞き、火事の照り返しを目にした時——、私は蜂起が起こったことを信じたくなかった。共産主義者が起こしたものだと思った。近日中の蜂起はないとした7月31日の午前の幹部会から受けた印象だった。

J. M. C. : 蜂起後の AK 総司令官として、オクリツキ将軍はどのようなコンセプトを持っていたか。

J. B. : AK についてオクリツキはいかなるコンセプトも持たなかった。政治を行っていた。しょっちゅう出張していた。

J. M. C. : 大佐殿は、蜂起後、蜂起についてオクリツキと話し合ったか。

J. B. : 話し合っていない。オクリツキは、その時の問題に集中する必要がある、過去に関わっているわけにはいかなかった。私はこの点で同意見だ。しかし、オクリツキは蜂起は成功だったと見ていた。人的被害、損害を出しながらも、63日間もドイツ軍と戦ったのだから。

J. M. C. : 大佐殿は参謀部長として、アンデルス将軍がオクリツキに宛てた、表に出ることを禁じた電報についてご存じか。その電報はオクリツキが現れる前に届いたのか、それとも後だったのか。

J. B. : オクリツキが表に現れないようにとのアンデルスの電報については何も存じあげない。

J. M. C. : 軍最高司令官が国に戻る案が浮上したのは、いつか。

J. B. : 暖かくなっていたので、おそらく夏だっただろう。もうコートは着ていなかったし、穏やかな天気だった。ある日の AK 幹部会に、ヤニナ・カラシュヴナがソスンコフスキの電報を持って来た。そこには、国に戻りたい旨が記されていた。ブル＝コモロフスキとペウチンスキはこのことに大いに不満だった。オクリツキは返事をまとめる時にいたが、大反対だった。返事を書いたのはペウチンスキとオクリツキである。軍最高司令官が戻れば大混乱となるので、その必要もないと彼らは考えたのである。何のために来るというのか。彼にしかるべき仕事を与え、安全を保証することも容易ではないのだから。

私はと言えば、空軍長のアダメツキと、ソスンコフスキがいつ、どのようにして帰還できるかを協議した。着陸地について合意を見ておきたかったからだ。

J. M. C. : 大佐殿は、軍最高司令官の AK 総司令部に対する姿勢は妥当なものであったとお考えか。

J. B. : AK に対する軍最高司令官の姿勢は妥当だったと思う。軍最高司令官は蜂起に反対だったのだから、蜂起を禁じるべきだったとの意見の者がいる。しかし、彼が出した電報が彼の見解を裏づけている。しかし、国内事情に精通しているわけでもないので、ロンドンから蜂起を禁じることは難しかったはずだ。それに、蜂起に有利な様々な条件——例えば、ドイツ軍の瓦解、ドイツでの革命、ヒトラーの死 [訳注: 正しくは、1944年7月20日のヒトラー暗殺未遂事件を指す] ——が生まれていたのだから。ソスンコフスキはすでに蜂起以前に、西側からの援助は請えないと言っていた。間接的ではあるが、明らかに、「蜂起はするな」と言っていたようなものだ。空挺部隊を要請することは無意味だった。

J. M. C. : 大佐殿は、1944年7月7日付の軍最高司令官の電報をどう思うか。そこには、「幸運な偶然の一致」が許すなら、ヴィルノやルヴフやその他の大都市を掌握せよとあるが…。

J. B. : この件については、私はまったく疑いを抱いていなかった。「幸運な偶然の一致」が問題なのだから。

J. M. C. : ブル＝コモロフスキが私に語ったところでは、ワルシャワ戦の実施を決めるに際し、7月7日付の軍最高司令官の指令を実行に移したとのことである。

J. B. : すべては状況をどう評価するかだった。

J. M. C. : つまり、ブル＝コモロフスキ、ペウチンスキ、オクリツキが戦闘を望み、自分たちの意図に副うように状況評価をまげたということか。もし [自分たちが] 戦わなければ、共産主義者が蜂起を起こすだろうと危惧していたようだ。

J. B. : そのとおりだ。

J. M. C. : 大佐殿はご存じだろうか？ 1944年春には、ジェベツキ大佐はブル＝コモロフスキに、消極的で煮え切らない指揮官に対しては、国民の怒りが残るだけだと言っていたことを。つまり、社会変革を促していたということなのであろうか？

J. B. : ジェベツキは事情通だった。皆が急激な変革を導入すべきという方向に傾いており、戦闘は不可避だと思っていた。タタルでさえ、そうだった。もっとも、効果的な戦闘であればということだったが。

J. M. C. : 大佐殿は、ジェベツキが蜂起の間に何かしらクーデタを企んでいたということを耳にしたことはあるか。

J. B. : たぶんそのようなことはなかったのではあるまいか。

J. M. C. : 蜂起とその結果が AK を解散させたのであり、蜂起後に AK 解体作業が始まったという主張に、大佐は同意されるか。

J. B. : 蜂起後は全土で敗北主義が蔓延していた。ワルシャワ駐屯部隊は捕虜にとられた。残りの部隊は完全に崩壊・解体した。雰囲気は非常にまずかった。九月戦役の後よりもひどかった。全般的な絶望感と士気の低下が支配的だった。とりわけ、ワルシャワを脱した人々の間でそうだった。彼らはひどい条件下に生きていた。完全なる敗北感と絶望感が支配していた。人々はすべての人とすべてのことに不満だった。自身の不幸を KG AK のせいにしてた。ブルの首を吊るか射殺すべきだという声を、私自身数度耳にしている。AK については地方ではなす術がなかった。解体のプロセスが始まった。真の解体は、ロシア軍の冬の攻勢——まったく驚きだった——の時に始まった。攻勢の後、私は AK 総司令官オクリツキの代行として、部隊は解散し、武器を秘匿し、ほかには何もするなと命じた。

J. M. C. : KG では若者を国内から出し、西側に送るよにとの軍最高司令官の勧告は検討されたのか。

J. B. : そのことについて話はあった。しかし、非現実的だった。そんなことが大規模に行えるわけがなかった。ドイツ軍がただちに察知したことだろう。若者は皆、西側で隊列に加わることに意欲的だ、とジェベツキは言っていた。だから、西側への移動命令は、大規模な放浪につながったことだろう。ドイツ軍はただちにそれを知ることになっただろう。NSZ の一群 (聖十字旅団) も加わった。しかし、それはドイツ軍の監視下で起こっていた。

J. M. C. : セルゲーエフ将軍がヴォウィン第27師団長の“オリヴァ”に対して行った申し出は、KG ではどう扱われたのか。

J. B. : 不信の対象だった。無駄だと思われた。

J. M. C. : セルゲーエフ将軍に出されたブル＝コモロフスキの対案が“オリヴァ”に届くのがあれほど遅れた理由は何か。

J. B.: わからない。

J. M. C.: ヴィルノの事態は KG AK とその意向にどのような影響を及ぼしたか。

J. B.: KG のメンバーはヴィルノの事態に驚いた。とくに、ペウチンスキが。ロシア人との間に外交関係を持たないので、予測するしかなかった。しかし、カーゾン線を越えたら、態度は変わるのではないかと思われた。

J. M. C.: ルヴフは？

J. B.: ルヴフについては、驚天動地だった。“ヤンカ” (ルヴフ地区司令官ヴワディスワフ・フィリポフスキ大佐) がジミルスキ大佐の許に行った理由がわからなかった。ポーランド軍の古参将校であるジミルスキが“ヤンカ”に何かを約束し、“ヤンカ”がジミルスキから何かを得たものと思われた。

J. M. C.: ということは、ルヴフで表に現れたことは大混乱だったということか。

J. B.: そうだ。

J. M. C.: AK 最高幹部が表に現れることについてはどうだったのか。

J. B.: “ブル” は表に現れることは期待していなかった。しかし、やる必要があると思っていた。これは、ロシア人と協調できるかを知る試金石となるものだった。ロシア人と協調するために我々が全力を尽くしている、我々のそうした意図にもかかわらず協調が実現しない——西側と、表に現れることに同調する人々に対する証拠となるものだった。ペウチンスキは、表に現れる時に我々が亡くなるとすれば、戦役であれ、大義のためであれ、同じことだ、と言っていた。

J. M. C.: 「ストリツァ」誌に載ったショスタクの記事 [原注—Józef Szostak, *Dziesięć dni przed powstaniem w Warszawie*, Stolica, nr 31 (1130), 3 VIII 1969 r.] について、大佐殿はどのようにお考えか？

J. B.: ショスタクはオクリツキに次いで戦闘に前向きだった人物だ。記事では、蜂起に反対だったと主張している。7月20日頃にワルシャワで蜂起がある旨を知った、とある。おかしい。1942年以降、ロヴェツキとタタルと私は蜂起計画の指針を議論してきた。次の仮定条件について検討した。

1). 1918年の時のように、ドイツ軍の瓦解が起こる。ドイツ軍は敗走する。この敗走は妨害しない。輸送部隊を武装解除させる。

2). ドイツ軍は機能している。東部戦線が崩壊しているにすぎない。この場合、ポーランドからドイツ軍を追放すべきである。

3). ドイツ軍は戦闘中にポーランドを去る。この場合、ロシア人の圧力を受けてドイツ軍がワルシャワを去る瞬間に、ドイツ軍後衛への [AK による] 攻撃が起こる。

4). ドイツ軍はヴィスワ中流域で防衛に入る。この時、AK は都市 [ワルシャワ] を離れ、限度を超えた戦闘からも身を引く。

ブル=コモロフスキとペウチンスキはこのことを知っていたにちがいない。それゆえ、7月21日に、いついかにしてワルシャワでドイツ軍と戦うべきか決断を下さなければならなかったのである。7月21日に3将軍が対独戦を実施すべきかを検討した理由が、私にはわからない。この問題はだいたい前に決まっていたことだからだ。オクリツキの意図に、指導的・軍事的考えはない。

J. M. C.: 大佐殿が一斉蜂起実施の変更について知ったのは、いつのことか。

J. B.: 7月21日から2、3日経って、私はクロフマルナ通り2番地で“ブル”と軽く話をする機会があった。“ブル”はこう言った。「我々がワルシャワでドイツ軍を袋叩きにすると言ったら、貴殿はどう思うか。ナポレオンが言ったように、敵を叩くなら、その主力を叩くべきだ。生きのいい部隊を潰す必要がある」。

私はこう答えた。「AK はドイツ軍に優勢を誇っているわけではないので、ドイツ軍を潰滅させることはできない。そのようなことは、ナポレオンも語ったとおりだ。さらに、ドイツ軍の主力はワルシャワの外にある。ワルシャワに駐屯しているのは、彼らの一部にすぎない。だから、AK は敵の主力を攻略できない。敵を包囲するためには、外縁で活動する必要がある。しかし、AK はそのような状態にない」と。ブルとの会話は大事なものであるとは思わなかった。12時間問題が議論された政府代表臨席の会議の後、ようやく私は、この問題が重要であることがわかったのであった。しかし私は、ドイツ軍を袋叩きにするという案を議論したくなかった。私はオクリツキと短い話合いを持った。ワルシャワ作戦 [計画] は即興だ。オクリツキは、「そのような戦いでは、即興はつきものだ。より勇敢な者が勝利するのだ」と私に言った。

J. M. C.: 7月31日午前の幹部会の展開は？

J. B. : “モンテル”を見た時、会議はおもしろくなるな、と思った。ペウチンスキの挨拶の後、イラネクがドイツ軍の配置について長大かつ詳細な報告を行った。彼に続いて、“モンテル”が話した。最初に、なぜ勝手に警報を発令したのか説明した。次に、自分の部隊の軍力と武装化について説明した。“ブル”は、警報解除は混乱なく行われたかと問うた。“モンテル”は、警報解除は被害も出さず、事件を起こすこともなく行われた、と報告したが、若干の部隊で兵士が解散したならず、問題があった、とも述べた。私は警報については何も知らなかった。“モンテル”はまた、「攻撃するにしても、手にすべきものがない」と言った。これに対しオクリツキは、「武器は敵から奪うのだ」とはっきりと言った。その時、“モンテル”はどもり始め、不機嫌になった。

J. M. C. : ボルケヴィチは7月26日のKG幹部会に大佐殿が出席していたとしているが……。

J. B. : 否、私は出席していない。

J. M. C. : 7月31日の午前の幹部会について記したポドレフスキの論文 [原注—Stanisław Podlewski, *Tak roztrzygali się los Warszawy*, *Za i Przeciw*, nr 31 (593), 4 VIII 1968] について、どう思うか。不正確な記述と誤謬がかなりあるように思えるのだが……。

J. B. : ポドレフスキは会議が9時に始まったとしているが、10時始まりだった。場所は、シェンナ通りではなく、たぶんパンスカ通りだった。HK (ヤニナ・カラシュヴナ) は会議に出ていなかった。彼女は13時頃になってようやく姿を現した。ポドレフスキが書いているのとは異なり、政府代表も“ワシュチ” [原注—スクロチンスキ將軍] もいなかった。会議の時に銃声が聞こえ、“クチャバ” (プルタ=チャホフスキ大佐) が何が起こったのか確認するために通りに出たというが、記憶にない。“グジェゴシュ” (ペウチンスキ) の報告は、ポドレフスキが書いているとおおりだ。彼の報告の後、出席者の間には、何か事を起こすような雰囲気があった。“モンテル”は私の隣に坐っていたが、私にちょっかいを出し、両方の掌を上にしてみせた。ポドレフスキが“ワシュチ”が言ったとしていることは、イラネク=オスメツキが言ったことだ。待つべきだ、と彼は言った。武器の状態は“モンテル”が説明した。オクリツキの発言内容は、書かれているとおおりだ。“クチャバ”が、「武器は奪えばよい」とのオクリツキの言葉に強く反応したというが、私の記憶にはない。それは“クチャバ”ではなく、“モンテル”だったのではなかろうか。会議の時に中断 (休憩) はなかった。イラネク=オスメツキと“モンテル”の報告の後、全員が自分の意見を述べた。その後、蜂起開始の時が到来したか否かをめぐって、意見表明を行った。意見表明の結果は次のとおりである。サノイツァは意見表明に加わらなかった。イラネク=オスメツキはたぶん反対意見だった。“モンテル”は即時蜂起には賛成ではなく、反対していた。“クチャバ”はおそらく反対意見だった。オクリツキは蜂起に賛成だった。ジェベツキもたぶん賛成だった。私は反対だった。ショスタクは賛成。“ワシチ”と“ベネディクト” (ルドヴィク・ムズィチカ大佐) は意見表明をしていない。その場にいなかったからだ。政府代表はいなかった。“グジェゴシュ”は質問に答えなかった。「総括すると、3人が賛成で、4人が反対」と言っただけだ。“デンホフ” (ズィグムント・ミウコフスキ大佐、第IV部長) がどう考えているかは、わからなかった。不在だった。“ベネディクト”についての話もなかった。ポドレフスキの論文はプルタ=チャホフスキの報告に依拠しているのではないかと思う。整然としているからだ。

J. M. C. : 午後の幹部会について論じたポドレフスキの次の論文 [原注—Stanisław Podlewski, *Tragiczna decyzja*, *Za i Przeciw*, nr 32 (594), 1968] について、大佐殿のお考えは？

J. B. : 第二の論文は、私がおその会議に出席していなかったこともあり、あまり興味深いものではない。7月31日の午後に“モンテル”が“ブル”に言ったとされていることは、同日朝にオクリツキが言ったことだ。「もし將軍が開始の決断を下さなければ、將軍は第二のスクシネツキになる」という文句は、オクリツキの言葉であって、“モンテル”のそれではない。

J. M. C. : 「嵐」を起草したのは誰か。

J. B. : タタルが「嵐」を起草した。

J. M. C. : キルフマイエルは彼に協力しなかったのか。

J. B. : キルフマイエルはこの時怪我で入院していた。オトフォックだったと思う。

J. M. C. : 「嵐」は、前線の移動にともない戦闘を遂行するという、ロヴェツキの構想に拠ったものだったのか。

J. B. : [ロヴェツキが考えた] 仮設 (仮定) のひとつに依拠していた。

J. M. C. : 実際には、「嵐」は地方蜂起が連続するものに変異してしまっただけではないだろうか。

J. B. : そのとおおりだ。連続する地方蜂起へと変わった。「嵐」はドイツ軍の後衛への攻撃として起草された。ワルシャ

ワでは12時間が決定的に重要だった。

J. M. C. : ワルシャワ戦に関し、大佐殿はどのような計画をオクリツキ将軍に伝えたか。

J. B. : 1942年にロヴェツキの指令に基づいて作成した計画だ。オクリツキはこの計画に関心がなかった。彼には、ペウチンスキと意見の一致を見た、自身のコンセプトがあった。それまでの計画は、敗北主義的だと思っていたのである。

J. M. C. : 「ワルシャワ戦」(Bitwa Warszawy) という文書の起草と、オクリツキが大統領に宛てた書簡について、大佐殿がご存じのことはないか。オクリツキの伝令(ヤニナ・コノパツカ)によれば、以上の2つは蜂起後にオクリツキあるいはその参謀部が記したものだという。同時発送であったが、その中身は相反するものである。「ワルシャワ戦」では、蜂起の敗北の原因は、ワルシャワへのソ連軍の攻撃が総崩れとなったからだとの文言があるが、オクリツキが大統領に宛てた書簡には、ソ連軍が活動を停止したからだとあるのだが……。

J. B. : 2つの文書については何も知らない。蜂起後、長期間オクリツキは一人であり、参謀部というものを持たなかった。オクリツキは、“ニル”(フィエルドルフ)を、参謀部長なる人物として連れて、ワルシャワからやって来た。“ニル”はまもなく NIE [原注— Niepodległość「独立」、反ソ地下組織] にまわったので、オクリツキは一人だったというわけだ。AK 参謀部は捕虜にとられた。蜂起に賛成だった者も含め、多くの者がオクリツキに不満だった。ある者はオクリツキを「自称司令官」として捉えていた。関係が好転するのは、ロンドンがオクリツキを正式に AK 総司令官に、私を同時にその参謀総長に任命した後になる。私は参謀部を組織した。

J. M. C. : オクリツキ将軍は、自身の構想や見解をどのようにしてブル=コモロフスキ・ペウチンスキ両将軍に押し付けたのか。

J. B. : オクリツキは軍最高司令官の伝令として国内に到達した。軍最高司令官に選別され、少将に任命されたのであった。国内では、人々は戦争と占領とに疲労困憊していた。オクリツキは休養をとっており、自信满满でもあった。ペウチンスキは多忙で、いつも神経が張りつめた状態にあった。数十という会議をこなさなければならず、その度に女子伝令に呼び出されていた。常に何かで神経が磨り減る任務であった。オクリツキは [ペウチンスキの] 疲れている様を利用したというわけだ。

J. M. C. : オクリツキが軍最高司令官を批判したのはなぜか。

J. B. : オクリツキは、表に現れ、妥協することなく闘うべきであると考えていた。だから、ソスコフスキは彼に対して用心深くなっていった。軍最高司令官は国内の状況についてまったく把握しておらず、ドイツ軍がすでに敗北していることも知らない——オクリツキはそう思っていたのだ。

J. M. C. : ロヴェツキのもとでもそのような役割を演じることができたであろうか……。

J. B. : 明らかにそれはない。その場合、参謀部の様子はちがったものになっていただろう。

J. M. C. : 参謀部にタタルが残っていたら、どうなっていたであろうか。

J. B. : タタルとオクリツキの間で骨肉の争いになっていたことだろう。タタルはいつもロヴェツキを認め、彼に忠実だったが、“ブル”についてはまったく評価していらず、「あの道化」と呼ぶ始末だった。

J. M. C. : 軍最高司令官がオクリツキを国内に送ったことは、ブル=コモロフスキ、そしてすべての問題にとってマイナスとなったように思われる。オクリツキの評判が最良のものでなかったのに、国内派遣の対象として彼が選ばれたことが、私には不思議なのだが……。オクリツキの友人は私に、「オクリツキは血の気の多い、いや多すぎる将校だった。飲兵衛で女好きだった」と言った。こういう評判があるにもかかわらず、彼が国内に送られ、参謀部内で高位に就けられたのはなぜなのか。

J. B. : コパンスキが私に、オクリツキの国内での振舞いはどうだったかと訊いたことがあった。「ワルシャワでのことはわからない。チェンストホヴァでは最高だった」と私は答えた。コパンスキは、「オクリツキの評判を尋ねた者はいない。もし尋ねていれば、当然彼は送られることはなかった。オクリツキが行ける場所はなかっただろう」と言った。すべては、コパンスキの頭越しになされたものだった。

J. M. C. : KG AK 参謀部の核は？

J. B. : 参謀部の核は、参謀長、作戦参謀、その他の長だ。ただ、実際には部隊は動いていない。部隊は、直属の協力者とともに各司令官が動かしていた。参謀部の正常な働きについては、話にのぼったことすらない。ロヴェツキ時代、“ブル”は政治専従だった。タタルは作戦問題に、ペウチンスキは諜報と運営に関わっていた。“ブル”のそばにはいつもペウチンスキがいた。

J. M. C. : 蜂起直前にドイツ軍は KG AK に対する大きな攻撃を準備しており、一部のメンバーはそのことを気にしており、不安が生じていた——そのように書いている研究者（例えば、スカルジンスキ [原注—Aleksander Skarżyński, *Polityczne przyczyny Powstania Warszawskiego*, Warszawa 1964, s. 263-264]）がいるが……。

J. B. : ドイツ軍は何らかの攻撃を考えていたにちがいない。私個人は最後の2週間、毎夜別の場所で寝ていた。7月16日、ゲシュタポは“センク”を捜しているながら、私のおじを逮捕している。その後、写真を持って、私が住んでいた住居に私の逮捕のために訪れている。私は内偵されていたのだ。しかし、彼らが来たのは、私が住居を出たあとだった。もし夜だったら、鉢合わせになっていたことだろう。私はその時、シアン化物を持っていなかった。古くなっていたので、交換用に取り上げられていたのだ。苛立ちはあった。

J. M. C. : ソスンコフスキが NSZ と AK の統合を期待していたというのは本当か。

J. B. : 本当だ。ソスンコフスキはそれを重視していた。NSZ と話をしていたのはブル=コモロフスキだ。2度目だったか3度目だったかの会合で話はまとまっていたのだが、ご破算になった。結局、部分的な統合で終わった。その他——聖十字旅団——はドイツ軍と協力した。ポーランドからの撤退に際し、同旅団はドイツ軍から工程表をもらった。こうして、ニュルンベルクまで行ったのである。

J. M. C. : 共産主義者は AK 兵をゲシュタポに突き出している、あるいはその逆が行われている——こうした非難に、大佐殿は戦時中に出くわしたことがあるか。

J. B. : AK 兵をゲシュタポに、あるいはその逆のことを耳にしたことはない。

J. M. C. : 表に現れることを伝える1943年11月20日付のブル=コモロフスキの指令がロンドンに着いたのは、1944年1月8・9日になってからだった。指令の発令とロンドン到着までに、これほど時差があるのは、どうしてなのか。

J. B. : わからない。私はロンドンから届くものはすべてに目を通していたが、ポーランドから出て行くものについては、すべてに目を通していたわけではない。

J. M. C. : ロシア=ポーランド関係が再開されないうちは AK は侵入するロシア軍の前に姿を現してはならないとする、1943年10月27日付政府訓令が国内で変更されたのはなぜか。

J. B. : 政府訓令は非現実的で、すでに起こったことに符合しておらず、国内の現状に合致していないものと受け止められた。

J. M. C. : 表に現れることに常に反対の姿勢をとってきた軍最高司令官が、すでに1944年1月11日付の自身の電報で、そのことに合意する旨を示し、同年2月12日にはそれを了承していることが解せないのだが……。

J. B. : AK 総司令官の姿勢に対し、軍最高司令官は、表に現れることを断念するよう説明するが、要請することしかできなかった。地下活動の下では変更はとても難しい。AK 総司令官の“ブル”を直接知っている者は誰もおらず、総司令官としての彼の周りには伝説さえあった。“ブル”を解任すれば、AK 総司令官と軍最高司令官の見解の相違を一般にも認めることになったであろう。人々は、AK 総司令官をなぜ替えるのだと問うただろう。

J. M. C. : シコルスキ将軍が亡くなり、グロト=ロヴェツキ将軍が逮捕された後、ポーランドには一本筋の通った——皆に強制され、すべてそれに従わなければならないという——政治路線が存在せず、あるのは3つの方針だったという主張に、大佐殿は同意するか。ロンドンでの首相と軍最高司令官の見解の相違——1944年7月、軍最高司令官は政府の政策に反対すべく、騒乱を企てていた——があり、3つの路線が出来ていた。つまり、ロンドンでは政府（とその政策）と軍最高司令官（自分の政策路を持っていた）がおり、国内では政府代表と AK 総司令官に代表される第3の路線があったということだ。

J. B. : 私は、貴殿のように3つに分けて考えたりはしない。占領末期に、国内がロンドンから単独行動を望んだことには、疑いの余地はない。ポーランドでは次のように言われていた。我々は国・民族の代表であり、戦後もそのように認識される。我々はポーランドを代表しているのだ。この独立のプロセスは、16人が表に出ることで終わった。16人の浮上はここから出たものだ。

J. M. C. : 私の意見では、戦争末期に国内では、駐ロンドン政府は外交分野でポーランドを代表しており、英米に協力を要請できるとの確信が生まれたように思う。この姿勢は1943年7月—1944年7月に明確に形成されたのでは？

J. B. : そのように考えるのは当然だ。レティンゲルのポーランド滞在後、政府と軍最高司令官の関係がまずいことは国内でも知られるようになった。状況がかくも複雑で難しかったことを思えば、国内の路線はある程度までは理

にかなうものであった。ロンドンから国を操作することは極めて困難だ。

J. M. C. : AK 総司令官の主張に一貫性があまり見られないことが解せない。一方で表に現れることを求めながら、他方で NIE を組織している。このことはロシアも知っていたはずだ。大雑把な作業と言わざるを得ない。

J. B. : ロシアはたしかに知っていた。共産主義者は AK に間諜を潜りこませていたから。

J. M. C. : 政府代表は NIE について知っていたか。国内の政治家たちの中には、NIE について何も知らなかったと断言する者がいるが。

J. B. : 政府代表は NIE について知っていた。

J. M. C. : オクリツキが作戦参謀に任命されたのはなぜか。次いで、7月末には NIE の代表にも任命されているが、なぜか。この2つの機能を同時に果たすことはできなかったのでは？

J. B. : “ニル” が NIE を創ったのだ。

J. M. C. : ということは、大佐殿が離任しオクリツキ将軍が NIE の代表に任命されたことに伴い、作戦参謀の地位は消滅したということか。

J. B. : そういうことだ。作戦参謀とは参謀長の作戦任務を負っていた。ロヴェツキは参謀長抜きで作戦参謀と直で作戦任務の一切をこなしていた。ロヴェツキ時代に作戦参謀がペウチンスキに会うことはめったになかった。ロヴェツキはペウチンスキの作戦能力に信頼をおいていなかった。これは私が受けた印象である。地下活動面でのことがそれを裏付けている。つまり、接触、会合などを避けていたということだ。

J. M. C. : ブル＝コモロフスキ将軍はレンティンゲルに会ったか。

J. B. : “ブル” がレンティンゲルに会ったかは存じあげない。

J. M. C. : 蜂起計画の主たる考えは、赤軍の勝利を自分たち [AK] の作戦遂行に利用し、自軍の勝利に利用したいとの意向にあるとの主張に、大佐殿は同意なさるか。

J. B. : 同意する。作戦開始時に関して言えば、前線の状況に合わせる必要があった。ソ連軍との間に連絡がなかったのだから。だから私はブルに、7月28日か29日だったと思うが(“ノヴァク” が指摘している7月30日ではない [原注—*Emisariusz: Wywiad z kapitanem Nowakiem, Na Antenie (Wiadomości), nr 962, 6 września 1964*])、ロシアの砲兵隊がヴィスワ西岸に(つまり、都市部に向けて)火を放つまでは、我々は動いてはならない、と言ったのである。

J. M. C. : どのような戦略的状況がワルシャワでの蜂起勃発を規定することになっていたのか。

J. B. : 決定は次の2つの戦略的条件に拠ることになっていた。a) . ソ連軍のワルシャワへの全面的攻撃の開始、b) . 南方からの側面包囲の開始。

我々の攻撃はドイツ軍がワルシャワからの撤退の開始に合わせて行うものとされた。ソ連軍の全面的攻撃は最初の攻撃でワルシャワに達するものと想定された。したがって、砲撃が、攻撃が開始されたか否かの指標になる。ヴィスワ西岸へのソ連の砲撃、あるいはその類は、ソ連の意向を知るデータとなる。すでに1942年以降、我々は、ソ連およびドイツの砲撃隊の実態について把握していた。どちらも砲撃の連射の庇護の下、前進するのである。敵の(例えば、砲兵)を弱めるための砲撃とは異なる。障害物としての火の遮断幕を敷く、攻撃の場合とも異なる。

砲撃の問題がどういう経路で持ち上がったのかご説明申し上げよう。タタルは出発前、トルンの砲兵教育センターの信頼のおける下士官の一群を私に薦めた。同センターでタタルは長年教官を務めていた。センターは高度の教育を施すことで知られていた。1944年6月、私は蜂起計画を現状に沿うようにするよう尽力していたが、その際、先の下士官を利用して特別偵察部隊を組織した。トップに砲兵のヴェテラン指揮官を据えた同隊は、都市をめぐる独露戦でソ連の砲撃を調べることが予定されていた。私はこのことについてペウチンスキと話をした。彼には時間をかけて、*artyleria pomiarowa* とは何かを説明しなければならなかった。その時私は、ロヴェツキがペウチンスキの軍事的知識に信頼をおいていなかった訳がわかった(これは私が受けた印象にすぎない)。長い話合いの後、ペウチンスキはこのことを大変気に掛け、この考えに非常に意欲を燃やした。彼はこの偵察部隊を“モンテル”に一任した。砲撃の問題についての私の発言はこうしたことに由来する。ロシア軍のワルシャワへの攻撃開始時の決定は重要問題であった。蜂起用意の発令はこれに拠っていたのだから。準備合図を早めに出してしまえば、ドイツ軍に対する我々の計画が御破算になるかもしれなかった。

J. M. C. : 実際には、戦略的要件のどれも満たされていなかったのでは？

J. B. : 蜂起は早すぎたということはないが、悪いタイミングで発令された。戦闘開始時は AK にとって適時ではなかった。我々にはひとつの決め手があった。それは主導権が AK が握っているということだった。攻撃の時期

を選ぶのは我々であり、ドイツ人ではない。我々はドイツ人が崩壊しているという早計な判断を下したために、この決め手は意味を持たなくなったのであった。クトシェバ將軍はいつもこう教えていた。「諸君！ 諸君が予測できないことを戦中に行う敵は、攻略できないものだ」と。

J. M. C. : 決断を下すにあたり、KG AK が極めて困難な状況におかれていたようだ。一般には、戦中では敵軍の状況と自軍の状況の2つの要素が分析対象となる。KG AK では4つを検討しなければならなかった。独・露・自軍に加えて英米の情勢だ。以上のすべてが判断を難しくしたのでは？

J. B. : 実際には、独・露・自軍の3つだ。KG は、技術的な理由から、英米の協力はありえないことを知っていた。

J. M. C. : 大佐殿は、蜂起に対するロシアの態度についてどのようにお考えか。私の考えはこうだ。1944年7月末、ロシア軍はたしかにワルシャワに向かったが、ドイツ軍に進軍を阻まれた。その後、ワルシャワへの攻撃を再開しようとは思わなかった。おそらくは、バルカンへの軍事作戦の必要があったことと、政治的理由の両方から。

J. B. : 私は、ロシアは意図的にワルシャワを制圧しなかったように思う。AK はソ連にとって邪魔だった。ワルシャワ解放という決定打をソ連から奪おうとしていたのだから。だから、ソ連はドイツ軍に蜂起を鎮圧させることを望んだのである。政治でしばしば用いられるマキアベリズムである。ロシア人が軍事的に苦勞していたことはたしかで——とくに兵站部において——はあったが、政治的判断も働いていた。ドイツ軍の瘦せた軍事力に遭っても、ロシアはその気になればワルシャワを制圧できただろう。

J. M. C. : 大佐殿は7月26日の作戦会議に出席していたか。

J. B. : 出席していない。

J. M. C. : もし私が大佐殿の言われることを正確に理解しているとすれば、かつての蜂起計画ではケルベチ橋と、ヴォラ地区につながる街道はドイツ軍のために[撤退路として]確保しておくはずだったのでは……。

J. B. : ケルベチ橋とレシュノ通りはプラガ地区からヴォラ地区へとつながる街道であり、これはドイツ軍のために残しておくつもりだった。もしすべての橋梁を閉鎖してしたならば、ドイツ軍はプラガ地区からの脱出しようとして西側から撤退路を開削しようとしただろう。それは結果的に市街戦につながったはずだ。

J. M. C. : 大佐殿が言われたことから判断すると、7月21日まで有効であった蜂起計画では、KG を戦闘期間中はワルシャワの外に出すはずだったということだが。

J. B. : 1944年7月21日以前には、蜂起が発生した場合、KG をスキェルニェヴィツェに移す手はずだった。脱出計画をまとめたのは“コルトウム”である。ペウチンスキを長とする全参謀部は、ワルシャワを離れ、首都以外のポーランド全域で戦闘を指揮することになっていた。戦闘が長期化した場合、参謀部が国の他の地区から切断されてしまうのではないかと懸念があった。参謀部がワルシャワを離れることはこれを防ぐものであった。ブルと、参謀部7名がワルシャワに残り、そこで“モンテル”とともに表に現れることになった。“ブル”はペウチンスキとたえず無線連絡を取り合うことになっていた。7月21日以降は、参謀部のメンバーが全員表に現れることが決められた。

J. M. C. : では、KG の所在地がモコトッフ地区と決まったのはなぜか。

J. B. : モコトッフ地区には蜂起司令部が置かれることになっていた。このため特別に通信網とアジトが準備された。

J. M. C. : 軍最高司令官宛ての報告書を書いていたのは誰か。

J. B. : ふつうは“ブル”とペウチンスキが書いていた。作戦参謀は作戦報告を書いた。第III部は報告書を書いていない。

J. M. C. : KG 内で、表に現れることに最も積極的だったのは誰か。

J. B. : ペウチンスキが、表に現れロシアに政治的声明を行うことを最も推奨していた。実際、出口の見えない状況下に置かれていた。ドイツ軍と戦った部隊は、ロシアに出頭することもあれば、彼らの指揮下に入ることもあれば、解散する場合もあった。東部で表に現れ、政治的声明を行ったが、それは、ソ連に対する挑発行為となった。

J. M. C. : 表に現れる行為の政治的意味とは何か。

J. B. : AK がドイツ軍に対して戦うことを示すこと。つまり、AK はドイツ軍に対して戦っているのであり、ボルシェヴィキに対してではないということだ。これはソ連の反応を探る試みであった。このことから明らかになることを示し、ロシア人と話し合えるか否かが明らかになる、試みとしての調査だ。ドイツ軍に対して戦い、赤軍との接点を求めるAK とポーランドをスターリンに示す時、西側に対する論争ともなりえた。

J. M. C. : ロシアがポーランド解放に入ると KG が計算に入れたのはいつか。

J. B. : 1943年冬、つまりスターリングラード戦以降、KG AK はソ連がポーランドを解放する場合を考慮した。それ以前は、バルカンから連合国軍がやって来るとの空想を抱いていた。

J. M. C. : 軍事的に見れば、ワルシャワ蜂起は、蜂起を起こすべきでない例として軍事大学で示すべきだとの主張に、大佐殿は同意なさるか。

J. B. : 軍事的には、もっと上手に蜂起を起こすことができた。蜂起はあのように至ったわけであるが、軍事的にはすべてが最悪だった。あつてはならないことがみな起こってしまったのだった。

注記：上記の文章はボクシュチャニン大佐の文章確認を受けている。

1969年12月1日、パリ、ヤヌシュ・ボクシュチャニン